

# 「永遠の贖い」



宗 教 部 長  
佐々木 哲夫

TOHOKU GAKUIN UNIVERSITY

# 大学礼拝

WORSHIP SERVICE

雄山羊と若い雄牛の血によらないで、御自身の血によって、ただ一度聖所に入って永遠の贖いを成しとげられたのです。

（「プライイ人への手紙 九章二節」）

イスラエルにとって、罪のへゆるしは、最も重要な事柄でした。罪を帯びる者は、神の御前に立つことのできない人生を送らなければならぬからです。彼らは、完全なゆるしを求めました。そのゆるしとは、もうこれ以上社会的罰を科さないという意味での（許し）ではなく、罪自体を消し去るという意味における（赦し）でした。罪の赦しとは、罪が消されるということですから、罪を犯さない状態に戻るということを意味

しています。すなわち、罪のない人（義人）と認められるゆるしです。

彼らは、いのちによって罪の赦しが実現されると考えました。しかし、いのちを献げてしまふなら、人は死んでしまいます。そこで、動物のいのちを代価として献げたのです。しかし、雄山羊や若い雄牛の犠牲では不完全です。彼らは、完全な赦しを求めつつも、繰り返し犠牲を献げたのです。動物たちの流れる血は、罪の悲惨さを例証するものとなりました。

約二千年前、イエス・キリストは、十字架につけられ、罪の赦しのための贖いとなりました。全く罪のない神の子の死です。換言するならば、それは、完全な贖いの実現でした。完全なので、そこから、一度の出来事で十分です。時空を

超越する完全な赦しが到来したのです。冒頭の聖句の「永遠の贖い」は、そのことを示しています。

約二〇〇〇年前という昔の出来事であるイエス・キリストの誕生を今日においてお祝いする理由は、そこにあります。すなわち、クリスマスは、時空を超越する永遠の贖いの到来であったのです。歴史の中にはじめて赦しの道が与えられた瞬間でした。それは、新しい時代の幕開けの瞬間です。二〇一三年、歴史を彩った大勢の人々と共に、私たちもまた、東北学院大学の礼拝堂でメリー・クリスマスの挨拶を交わしたいと思います。

2013年

クリスマス特集号



CHAPEL NEWS

第127号

# クリスマスに想う



大学長  
松本 宣郎

## 私がクリスマスというものを意識

と云うか体験したのは、おそらく多くの人がそうであろうけれど、かなり幼いころのクリスマスプレゼントから、であった。その次が、幼稚園（近くの教会付属の幼稚園に通った）の生誕劇だったと思う。もちろんクリスマス・ページェントなどというしゃれた表現は記憶になく、「イエス様のお誕生」というようなイメージであったろう。

クリスマスを、神が人間の姿をとって、人類の罪の身代わりとなるために地上に生まれたことを祝う行事、として聖書的に認識したのは教会に通うようになった十代のことである。

さてそれから、少し知識がついて生意気になって、クリスマスの英語綴りが気になってきた。Xmasと綴るのはなぜか？

Christmasという語があるのに「X」とはどいうことか。これはキリスト、Christのギリシア語源の頭文字がX (Xistos)だから、と知って納得した。すこし端折るが、要するにChristmasの真の語源はラテン語で、missaChristiすなわち「キリストのミサ」から来ている、というのがたどり着いた正解であった。

ところで「ミサ」はカトリック教会の最高の聖なる礼典である。神が人となり、肉と血をもつ者となって、すべての人の罪を購うために十字架について死に、そして復活した。そのことは人に救いの約束を与えるもので、このことを信じ受け入れる者が礼典にあずかる。その礼典は、礼拝ごとに行われるものである。そしてそれがキリストの体であるパンと葡萄酒を食する以上、すべてのミサは「キリストのミサ」となるはずである。

だから古来カトリック教会では、キリストの誕生日とされる二月二十五日の礼拝を、「誕生のミサ」などと呼んだものと思われる。それがラテン語から中世英語を経てChristmasという語が生まれたとき、多分大事なミサという意味で二月二十五日のミサを指して用いられるようになり、やがてその日そのものを指すようになったものだろう。かくして辞書的にChristmasは、「二月二十五日、キリストの誕生日」とされるの

である。

「大事なミサ」とは言ったが、教会暦の中でもっとも大事とされたミサが「誕生のミサ」だったのか、「復活のミサ」がそうだったのではないか、との思いも小さくはない。復活日は全く別の呼称、パスカ（元来ユダヤ教の「過ぎ越しの祭」を指し、ギリシア語も同じ語を用いて、キリスト教会では「復活日」の意味でも用いられた。ラテン語も同じ語。英語では「イースター」）、が早くより称えられ、この日は明らかに「誕生」よりも古い時代から祝われていた。それは四世紀の教会史家エウセビオス『教会史』からもわかる。このことの考証は非常に重要な初期キリスト教史上の問題であるので、別の機会にしないでなすまい。

さて、私たちの間で「クリスマス」は、正確にはどういう意味で理解されているだろうか。やはり「キリストの誕生日」すなわち二月二十五日であるうか。どうも漠然とはもつと広く、「ジングルベル」や「きよしこの夜」が歌われ、プレゼントセールにツリーやサンタなど特有の飾りがつく、二月初めから始まる祭的現象、というあたりではないだろうか。日本人が年一度だけクリスマスチャンなる、などと揶揄される期間、などもよく言われる表現であるう。

そのことに異議を申し立てるものではないが、「クリスマス」をキリスト教として意義づけるためには、英語辞書的な語義は不

十分だということはよく認識しなくてはならない。それは、中世キリスト教、ラテン語の世界では備わっていたはずの「キリストの誕生のミサ」という意味が辞書ではすっぽり抜けている、ということに他ならない。キリストの誕生の懐かしく牧歌的なイメージ、そこに間違いなく神の不思議な業への畏敬と信仰、感謝の思いがこめられてクリスマスが認識されているとしても、クリスマスは神の子の到来が人類の救いのため、成長した後、十字架で死に、復活するためであったことに感謝する「礼拝」でなくてはならない、と思つのである。

日本のプロテスタント教会では、通例二月二十五日から逆算して七日前の一九日まで日曜があたれば、その日の礼拝が「クリスマス礼拝」として祝われる。それが真に教会のクリスマスである。それが他のキリスト教国では、何曜日であれ二十五日その日をクリスマス礼拝とすることが多いようである。どちらが望ましいとも言い切れない。大切なのは礼拝を持って祝うことだからである。

今年もまたクリスマスの日を迎える。世界の平和のために、被災地の方々のために、そして東北学院のために生まれた救い主の誕生を礼拝をもって感謝し、祝いたいと思う。

# クリスマス —光は闇の中で輝いている—



学院長  
星宮 望

意味を考えて見ましよう。

2011年3月11日の東  
日本大震災の当日の夜を覚え  
ている方々も多いと思います。

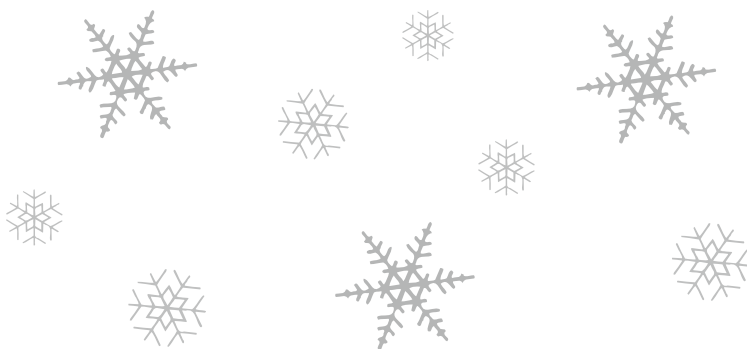
大地震の時に、東北学院大学で  
は全学の教授が土樋キャンパス  
に集まって年度最後の全学教  
授会を開催していました。学長と

**ク**リスマスの季節がまいりました。  
クリスマスとは、われわれ人類の救い  
主としてのイエス・キリストの生誕を  
お祝いするものであることはよく知ら  
れています。キリスト教国でない日本に  
おいても、どういっわけかクリスマス  
楽しみにしているひと、祝うひとが多い  
ようですが、その意味・意義を理解して  
いる方が少ないように思います。東北  
学院大学に学ぶ学生諸君は、毎日の大  
学礼拝を通じてその意味・意義を理解  
していることと思います。ここでは、改  
めてクリスマスが神の御子・救い主が  
お生まれになった、すなわち全ての人  
を照らすまことの光が世にきたことの

避難・連絡体制に入りました。多くの  
教職員とともに夜遅くまで種々の対応  
に追われて、一段落してから夜道を徒  
歩で自宅まで帰りました。帰宅できな  
い多くの方々に毛布や食料品を配布す  
るために自宅に帰れる人は徒歩でも帰  
ることにしたからです。この晩には、電  
力供給が停止していましたので、大き  
な国道も、普通に利用している県道も  
明かりが全くない、暗闇の世界でした。  
その中を時々自動車が通るので、手持  
ちの白いタオルを手で大きく振り回し  
て歩行していることを運転者に示して  
道路を渡りました。この闇夜の中を歩  
いていたときに、気がついてみると空に

は満天の星がきらきらと輝いていてそ  
れは見事なものでした。改めて、真っ暗  
闇になってみると、光を見ることが、意識  
することが出来ることに気がつきまし  
た。この小さな経験以上に、東日本大  
震災の衝撃の中で多くの人が苦難・  
困難の暗闇の中に、これまで思っても  
いなかった小さな光のありがたさ、素  
晴らしさに気がついたのではないで  
しょうか？そして、多くの困難な生活  
の中にあつて、確かな希望をどこに見  
出したらよいかを求め続けている方々  
も多いと思います。人間の作り出すも  
のは必ずしも確かな希望に結びつくこ  
は限りません。東日本大震災のよう  
な希望をこえる究極の災難の中の確か  
な希望は、自分たちの力で作り出せる  
ことではなく、神様からの恵みからで  
はないでしょうか？言い換えれば、われ  
われ人間が、尊大になってしまい、神様  
の御心から離れてしまったことによつ  
て引き起こされた暗闇の世界にいると  
ころに、救い主を遣わしてくださいと  
思います。

改めて、救い主イエス・キリストの誕  
生は、すべての人を照らすまことの光  
が世に来たこととして聖書が告げてい  
る(ヨハネ1:9)ことを感謝して受け  
止めたいと思います。



## 「世の光イエス」 よ ひかり

大学宗教学主任 原口 尚彰



「イエスは再び言われた。  
『わたしは世の光である。  
わたしに従う者は暗闇の中を歩かず、  
命の光を持つ。』」

(ヨハネ八・一二)

毎年十二月になると神戸では、仲町通を中心とした二帯に様々な色のイルミネーションを灯してルミナリエが行われます。これは暗闇の中に輝くイルミネーションが織りなす幾何学模様様の通りの下を歩いて通って美しい眺めを楽しむイベントで、老若男女多くの人々が参加します。実は、ルミナリエは一九九五年の十二月から始まっており、その年の一月二十七日に発生した阪神・淡路大震災からの復興を願う企画として、当初は「復興神戸に明か

りを灯そう」ということが言われました。ルミナリエの明るい光は、神戸の人達に取り希望の光を象徴するものでした。

私たちが住んでいる仙台では、一九八六年以来、十二月に入ると定禅寺通りの櫻の木にイルミネーションが灯される光のページェントが行われています。クリスマスを待つアドヴェントに相応しい企画ですが、震災後は、特に、東日本大震災の被災からの復興を願って光を灯すという意味が強調され、イルミネーションが希望の光を象徴するものとなっています。

暗闇の中に輝く光が将来の希望を象徴するものとされることは、古来様々な文化や宗教の中に存在しています。例えば、旧約聖書の中には、主なる神を暗闇を照らす光に例えた次のような箇所があります。

「見よ、闇は地を覆い、  
暗黒が国々を包んでいる。  
しかし、あなたの上には主が輝き出で  
主の栄光があなたの上に現れる。」

(イザヤ六〇・二)

先に読んだイエスの言葉は、エルサレムの神殿の境内でユダヤ人の人達に語られています。実に大胆に、イエス自らが「世の光である」ことを宣言しています。旧約的信仰に立つユダヤ人の人達にとつて、主なる神が光であるということは問題なく受け入れることが出来ることでありました。しかし、

ナザレ人イエスが自分自身を「世の光」であると宣言することは、なかなか受け入れることが出来ないことでした。世の光であるイエスを受け入れることは、イエスを神の子・救い主と信じることを意味したからです。多くのユダヤ人達はこの言葉に躓き、信じるに到らず、不信の暗闇に留まることになりました。しかし、少数の人々は躓きを乗り越えて、イエスを信じ、その言葉の中に永遠の真実と人を救いに導く力を見出しました。イエスが世界の人々に命を与える希望の光であるかどうかということは、自然科学的な事実や法則のように、客観的な証拠やデータと推論によって証明する事柄ではありません。それは語られている言葉を信じて初めて分かる主体的・経験的事実に他なりません。イエスの言葉は信仰という一つの知的跳躍を行う事への招きの性格を持っています。

十二月の後半は二年で一番昼が短く夜が長い時であり、私達は暗い闇の中で長い時間を過ごしています。また、二年半前には、千年に一度という規模の東日本大震災が起こり、東北は壊滅的な打撃を受け、現在も地震津波原発事故の被害の後遺症に苦しんでいます。日本全体を見ると少し景気が上向き始め、オリンピックの東京開催が決まり、少し明るくなる兆しが見え始めていますが、被災地東北は取り残された観があり、いまだに闇の内にあると言っても良いでしょう。しかし、世界を覆う闇が深ければ深い程、人は光の到来を求めるものです。暗い世界にあって、世の人々の心を照らす希望の光である神の御子キリストが一人の心に到来することを祈ります。

各キャンパスのメッセーજ

Izumi

泉キャンパス

大学宗教主任

村上 みか



街にはクリスマススのイルミネーションがあふれ、寒く暗い冬の日にいくらかの温かさを与えてくれているようです。しかしその美しい光のもとで、人は必ずしも明るく輝きに満ちた生活を送っているわけではなく、食品偽装や宅配冷蔵偽装、保険金横領やストーカー殺人など、人が人を欺き、傷つける事件が後を絶ちません。複雑な社会の中では人が誠実に生き、信頼関係を築くのが不可能なのかと、嘆かわしい思いになります。

この人間の弱さや愚かさを私たちがよく理解し、その現実を受け止めるところから人としての道が開かれてくることを、イエスは教えました。彼の誕生を祝うクリスマススは、したがって重い人間の現実を改めて思い、そこから脱することを願うときと言えるでしょう。同時に道が開かれることを確信し、希望をもって前に進むことを祈るときでもあります。良いクリスマスを迎えください。

Tagajo

多賀城キャンパス

大学宗教主任

原田 浩司



毎年この時期になると、ノルウェーのオスロでノーベル賞の授賞式が行われます。ここ数年、科学の分野で日本人の受賞者がいましたが、今年を受賞者がいませんでした。

一九七九年にノーベル平和賞を受賞したマザー・テレサは次のように語っています。

「沈黙が実を結ぶと祈りが生まれ、祈りが実を結ぶと信仰が生まれ、信仰が実を結ぶと愛が生まれ、愛が実を結ぶと奉仕が生まれ、そして、奉仕が実を結ぶと平和が生まれる。」

多賀城キャンパスの礼拝堂は一人ひとりの沈黙が実を結ぶ場所であると言えます。そして、沈黙は大きな実を結ぶはじまりです。きよしこのよる」は英語で「サイレント・ナイト、ホーリー・ナイト」とはじまります。沈黙の静寂の中で、クリスマスの出来事は起こります。

多賀城キャンパスの一人ひとりが、静寂のクリスマスの中で豊かな実を結ぶことができるよう期待しています。

Tsuchitoi

土樋キャンパス

大学宗教主任

野村 信



クリスマスおめでとございます。

主イエス・キリストがユダヤのベツレヘムで誕生されたことは、今も私たちに変わりなく尊い、喜ばしいことです。なぜなら神が人として地上に生まれ、私たちと共に生きてくださり、大切な教えを語り、生きるこの意味と新しい命を付与して下さったからです。

同時にクリスマスは、神の愛が地上にあふれた時です。それは神の御子が、いずれ人類のために死んで蘇り、大いなる希望、喜びを地上にもたらすために、神が大切な独り子を送り出してくださったからです。

「神は、その独り子をお与えになったほどに、世を愛された。独り子を信じる者が一人も滅びないで、永遠の命を得るためである。」

(ヨハネによる福音書三章一六節)

クリスマスの意義はとも深く、豊かです。今年もその意義をみんなで思い起こし、喜び、心から祝いたいと思います。

# 2013 年度 宗教部の活動

## 通 年

大学礼拝

礼拝(朝) 土樋・泉・多賀城キャンパス

月～土曜日

礼拝(夜) 土樋キャンパス

毎週水曜日

寄宿舎礼拝

泉女子寄宿舎

毎週月曜日

泉寄宿舎・旭ヶ岡寄宿舎

毎週火曜日

聖書研究会

土樋・泉・多賀城キャンパス

宗教部会

毎月

## 四 月

『大学礼拝・チャペルニュース』

二四号(新入生歓迎号)発行

『二〇一三キリスト教活動の

ハンドブック』発行

第十八回スプリングカレッジ

(十三日)

## 五 月

春季宗教教育強調週間

特別伝道礼拝

・泉キャンパス (八日)

・土樋キャンパス「朝」(九日)

説教者 林 牧人氏

(西新井教会牧師)

・多賀城キャンパス (八日)

・土樋キャンパス「夜」(八日)

説教者 藤野 雄大氏

(西千葉教会伝道師)

## 六 月

礼拝奉仕者懇談会

・土樋キャンパス (六月十日)

・多賀城キャンパス(六月十一日)

・泉キャンパス (六月十三日)

『大学礼拝・チャペルニュース』二五号

(春季特別伝道礼拝特集号)発行

キリスト者等推薦学生との懇談会

(九日)

## 七 月

第三十九回サマーカレッジ

(八月五日～七日)

## 八 月

第五十八回教職員修養会

(三日～四日)

## 九 月

説教者 山北 宣久氏

(青山学院院長)

第三十六回青山学院大学合同

チャプレン会議

(九月十五日～十六日)

## 十 月

秋季宗教教育強調週間

特別伝道礼拝

・泉キャンパス (八日)

・土樋キャンパス「朝」(九日)

説教者 松井 直氏

(福音館書店相談役)

・多賀城キャンパス (九日)

・土樋キャンパス「夜」(九日)

説教者 中村 順子氏

(日本女子大学非常勤講師)

## 十一 月

『大学礼拝・チャペルニュース』

二六号

(サマーカレッジ・秋季特別伝道

礼拝特集号)発行

## 十二 月

第二十五回

泉キャンパスクリスマス(六日)

キリスト者等推薦学生との懇談会

(初旬予定)

『大学礼拝・チャペルニュース』

二七号(クリスマス特集号)発行

大学クリスマス

・泉・土樋キャンパス(十九日)

・多賀城キャンパス(二十日)

説教者 長倉 勉氏

(伊豆長岡教会)

## 二〇一四年

一月 第十八回キリスト者教員研修会

(十七日)

二月 礼拝オルガニスト懇談会

(二十四日)

礼拝司会者(牧師・宣教師)懇談会

(二十四日)

## 三 月

大学礼拝説教集 第十八号発行

研修会・修養会発題報告集発行

## 編集後記

クリスマス特集号をお届けします。礼拝堂にツリーが飾られ、クリスマスへの讃美歌が流れ、多くの大学一年生にとっては、今までにないクリスマス体験であると思います。しかし今年のクリスマスを通してキリストの誕生の喜びと尊さを深く実感してください。今回も多くの皆様のご協力によって紙面が完成したことを感謝します。(N)

二〇一三年十二月 東北学院大学宗教部  
〒九八〇-八五一  
仙台市青葉区土樋二丁目三番一号